

埋門下の雁木を整備しました。

津山城の搦手側、本丸の北側にある埋門下の雁木（石の階段）を整備しました。

埋門下の雁木は、津山城内の雁木の中でも廃城後に舗装や補助段の設置といった改変の痕跡が少ないことが特徴です。しかし、本来あった石が抜けてしまったり、割れてしまったり、ずれてしまっているため、安全に通行することが難しくなっていました。

そこで今年度は、なるべく現状に手を加えず、安全上問題のあるところを江戸期の姿に復旧するように整備を行いました。



写真12 雁木撤去前（南西から）



写真13 雁木に残る堀の痕跡  
裏鉄門に近接する雁木の端を観察すると、端から約1尺幅で角が削られています（赤矢印）。これは、写真2の絵図に描かれている「登り堀」（緑丸部分）の痕跡と考えられます。



写真14 基礎部分の状況（西から）

整備はまず、各石に番号をつけることから始めました。そして、糸を張って復旧後の石の位置を決めてから石を取り外します。取り外した石は、1つ1つ記録をとり割れているものは接着して元の姿に戻します。石材の傷みが激しい石は交換しました。

続いて、雁木の石にずれが生じた原因を探るため、基礎部分の確認を行いました。その結果、基礎の構造は盛土や栗石の上に平らな割石を置くものであり、ここに雨水とともに土が流れ込むことによって、割り石や基礎の上に置かれていた雁木の石が押されて動いてしまったことがわかりました。

最後に、雁木を据え直し、遺構を保護するために土系舗装を行いました。写真で白っぽく見える石は、交換した石（写真15の青丸部分）と補填した石（写真15の赤丸部分）です。

今回の整備により、埋門下の雁木は安全に通行できるようになりました。また、傷みが激しいため交換した石の中で最も大きいものについては接着し、本丸東側に展示しています。整備の過程の一部をみなさまに見ていただければと思います。



写真15 整備後（北から）  
青丸は交換した石、赤丸は補填した石です。

津山城だより No.20  
2016年3月  
津山市教育委員会 文化課

発行年月日 平成28年3月31日

編集・発行 津山市教育委員会文化課  
〒708-0824 岡山県津山市沼600-1  
TEL (0868) 24-8413

印刷 (有) 弘文社

本丸御殿地下室の発掘調査を実施しました。



写真1 発掘された本丸御殿地下室（上から）



図1 発掘調査位置と整備位置

史跡津山城跡保存整備事業では、現在通路部分を中心に整備を進めています。整備工事に先立ち、通路とその周辺部の発掘調査を行っています。

平成27年度は、搦手側の本丸御殿地下室、裏鉄門の南側と東側、大手側の冠木門枅形虎口内の発掘調査を行いました。発掘調査により、築城の際の造成の状況や築城時の地表面等を明らかにすることができました。

整備工事では、本丸搦手側の埋門から裏鉄門にいたる雁木（石の階段）の積み直しを行いました。

今回は、これらの事業概要を中心に紹介します。



図2 搦手側発掘調査箇所拡大

### 本丸御殿地下室について

本丸御殿の地下室は、本丸から搦手口に降りる裏鉄門枡形虎口の東側にあります。枡形虎口とは、高い石垣などに囲まれた四角い空間で、城を守るための重要な構造です。裏鉄門枡形虎口東側の石垣は上下2段になっています。上段の石垣は枡形虎口を構成する東西方向の石垣に対して直交し、下段の石垣は斜めになっており、この間は三角形の平坦面がつくられています。



写真2と3 絵図と現地の比較

赤線が上段石垣、青線が下段石垣のラインです。絵図の矢印の先には、「梯子上り口」とかかれています。

本丸御殿の絵図面をみると、本丸御殿は裏鉄門枡形虎口内にはみ出すかたちで建てられており、御殿西端のラインは、下段の石垣と一致しています。枡形虎口は通常方形につくられるため、下段の石垣は御殿を建てる際に付け足されたかと想定されてきました。絵図には「梯子上り口」の記載があることから、三角形の平坦面は地下室として利用されていたと考えられます。今回は、この部分の構造を確認する目的で調査を行いました。

### 調査概要

調査区の北側では、現在の石垣の南側からもう1列石垣（写真4の紫線部分）が見つかりました。この石垣は上段石垣と角部分がかみ合うように造られていることから、現在の石垣よりも1段階古いと想定されます。古い石垣のうち西寄りの1石には、ほぞ穴（写真4の緑丸部分）がありました。ほぞ穴が見つかった位置は、写真2

の絵図の「梯子上り口」部分にあたることから、ほぞ穴は地上へつながる梯子（階段）の痕跡と推測されます。

古い石垣のさらに南側では、石列（写真4の黄色線部分）が見つかりました。石列は1段のみで、南側に面をもっています。石列の上面と下段の石垣の上面はほぼ同じ高さで、周囲には炭の層と敷石が広がっています。本丸御殿は文化6年（1809）に火災にあっているため、炭の層は火災の痕跡、敷石は火災以前の床面と考えられます。石列の15cm下は地山であり、上段の石垣は地山を掘りこんで石垣を構築したことが確認できました。

下段石垣の天端石近くでは、扁平な石を重ねた基礎のようなもの（写真5の赤丸部分）が2か所で見つかりました。これらは、本丸御殿の柱位置の痕跡と推測されます。また、下段の石垣上面には、面を平滑にするためのノミによる加工痕がありました。これは本丸御殿の建物の土台をのせるために施されたものと推測されます。

### まとめ

今回の調査では、本丸御殿地下室の床面や梯子の痕跡を確認することができました。また、床面の25cm下から地山が確認されたことにより、下段石垣は本丸御殿を建てる際に後から造成されたものではなく、建築設計の

写真4 本丸御殿地下室調査区北側  
紫線が古い石垣、緑丸がほぞ穴、黄色線が石列です。写真5 本丸御殿地下室西側  
赤丸部分が柱位置の痕跡です。

段階から地下室にするために地山を削り出して成形していたことがわかりました。しかしながら、当初から想定されているにもかかわらず、なぜ枡形虎口に対して斜め方向の石垣を築いたのか、検出された石列はどんな役割を果たすのかなど疑問点も残りました。これらについては、引き続き調査成果を詳細に検討していきたいと考えています。

### その他の発掘調査について

今後の整備工事に先立ち、江戸期の地表面の高さや構造物の有無の確認を目的として通路の周辺部分の発掘調査を行いました。

### 裏鉄門南側

十三番門の南側を調査しました。調査区南側の石垣面には排水口があるため、ここから流れる水を受けるための排水施設の確認も目的としました。

調査の結果、豊島石製の暗渠排水溝が見つかりました。この排水溝は、調査区東側にある腰巻櫓石垣西面で見つかった排水溝とつながり、西方向へのびて、裏中門枡形虎口南側石垣北面にある排水口につながる（図2の青点線）と推測されます。排水溝は築城当初のものではなく据え直されており、据え直しの際には土を盛って地上げが行われていることがわかりました。

排水溝の南側では石積み遺構が見つかりました。調査区南側石垣面にある排水口からの水を受ける構造物の一部である可能性があります。石積み遺構の最下段と豊島石製排水溝の上面の高さが同じであることから、この石積み遺構も築城当初のものではないと考えられます。

写真6 (左) 裏鉄門南側調査区  
の全景 (北から)写真7 (上) 裏鉄門南側遺構部  
分の拡大

### 裏鉄門東側

裏鉄門と埋門の間の平坦面を調査しました。調査区の中央は大きな攪乱を受けていましたが、築城の過程と江戸期の地表面が確認できました。

埋門下の雁木と本丸御殿地下室の下段の石垣は、ともに地山を掘りこんで築造されています。江戸期の地表面

は、基本的には地山を切って造られており、谷地形であるところは橙色の盛土で埋めていることがわかりました。

埋門下の雁木1段目の側面を観察すると、どの石も同じ高さまでノミ加工が施されており、ノミ加工の最下部と江戸期の地表面の高さが同じであるため、この部分は地表面に露出していたと推定されます。

### 冠木門枡形虎口内

冠木門を入った正面には、もとは番所があり番兵が入城者の見張りをしていました。現在は、明治時代以降に取り付けられた鶴山館にいたる石段があります。今回は番所の建物の痕跡を確認する目的で調査を行いました。

調査の結果、南東隅で1か所上面が平らな石（写真11の矢印部分）が見つかりました。位置関係から番所の建物の礎石の可能性がありますが、ほかの場所でみつかっていないため、詳細はわかりません。明治時代以降に取り付けられた階段の下に遺構が残っている可能性があります。



写真8 裏鉄門東側全景 (東から)



写真9 ノミ加工部分拡大

写真10 津山絵図 (元禄10年頃)  
に描かれた冠木門番所

写真11 冠木門枡形虎口内調査区全景 (西から)